
オ

柳 大知

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
才

【Nコード】
N3545F

【作者名】
柳 大知

【あらすじ】
思いもしない才能が突然目覚める男、しかしその才能は何故か大事な所で消えてしまう。彼の身に何が起きているのか？そして彼は一人の老人に出会い…

誰も信じてくれないだろうが、俺の身に起きたことを話そう。

あれが初めて出たのは、中学2年のときだ。

体育の授業で100M走の測定があった。特に足が速くない俺は、どうせタイムは出ないが隣を走る太った奴には負けまいと走り出した。

だがそこで今まで体感したことの無い風とスピードを感じた。俺は猛スピードで走りながら、いつもの自分ではない気がした。

そして、スタート前に気にしていた隣の奴のことなど忘れ、ただ自分に驚きながらゴールした。

「すごい、中学生の日本記録だぞ、お前、陸上部だっけ？」

驚いて近づいてきた体育教師が俺に言った。

「いえ：自分でも驚きました。」

体育教師の持つストップウォッチがしっかりと俺の日本記録が嘘ではないことを示していた。

それからすぐに、噂を聞いた陸上部の顧問がスカウトにやってきた。

正直、興味はなかったが、顧問の言った「日本代表になれる」という言葉で入部を決めた。

今まで何の才能も無いと思っていただけに、人より優れたものが見つかり気分はよかった。

その後、練習でも好タイムを連発した俺は、県大会に出場するようになった。

優勝間違いないし、俺を知る人物はみなそう思っていた。

だが、俺は予選で敗退、しかも見事なビリ、走破タイムは出場者の中でも最下位。

陸上部の顧問には、とても全力で走っているようには見えなかったようだ。

「何で本番でふざけるんだ。お前の名を広めるチャンスだったのに。馬鹿か！」

と罵倒され、説教された。

だが、俺は全力で走っていた。それで、タイムが出なかったのだ。全力で走りながら離されていく、あのとき感じていたスピード。よく考えれば、あれが本来の俺の足の速さだった。

大会後すぐ、陸上部をやめた。

「ちゃんとやれば、お前なら世界を目指せるんだから」

と顧問に引き留められたが、

「やる気が無くなりました。」

と、中途半端な理由だけ言っただけで早々にその場をあとにした。

足が遅くなったというか、元に戻ったというのが正しいのだろう。目立つ才能もなくなった俺は、また特に何もないグダグダな日々を過ごし、高校生になった。

そして、高校1年の夏、またあれが起こったのだ。

高校入学から数ヶ月経ち、休み時間の教室で決まって固まるグループが出来だした頃、俺も共通の趣味を持つ仲間達と出会った。

みな、当時流行っていたロックバンドのファンで、俺達はバンドを結成することになった。

メンバーは4人、俺以外の3人はもともと楽器ができて、その内1人は本格的に作曲をしていた。

俺は年の離れた兄が使っていたベースが家にあるのを思い出し、一番地味なベース担当をかって出た。だが、みな歌に自信が無いらしく、まずはボーカルを決めてからという話になり、すぐにカラオケ屋に向かうことになった。「一番上手い奴がボーカルな」と誰かが言い、順番に歌い出した。が正直、俺以外の3人はみんな平凡だ

った。普通に歌ったらこのメンバーの中では俺が一番上手いかもしれない、そう思いながら俺は歌いだした。

だがそこで、あの感覚に襲われた。

突然足が速くなったときのように、自分でも信じられない自分の歌声。

歌いながら、メンバーの顔を見る、驚きの表情を浮かべ、顔を見合わせ何か言っていた。

「お前しかいないだろ。」

バンドのボーカルが決まった。

それから、とんとん拍子にバンドは成長していき、オリジナル曲も数曲できていた。

文化祭でそれらを披露すると、噂は一気に広まり、父親がライブハウスを経営しているという先輩まで登場し、そこでのライブも見事に成功した。

曲を作った奴が、今現在プロの作曲家になっているのだから、曲の出来も良かったのだが、ボーカルが魅力的という意見も多かった。すべてが正しい方向に運んでいた。

さらに、話は進み、高2の秋に、インディーズだがCDデビューが決まり、ミニアルバムのレコーディングを終えた。そこが絶頂だった。

アルバムのレコーディングを終えた翌日、夜に行われる地元ライブハウスでのライブのリハーサル中だった。

その日、初披露の予定だった新曲を歌おうとした、いや俺はちゃんと歌っている、だが演奏が止まった。

「どうした、喉の調子でも悪いのか？」

俺には、わかっていた。たぶん、あの歌声はもう、出ない。

その日のライブは中止になった。俺はその日以来、歌っていない。

インディーズで発売されたCDは話題を呼び、ライブの出演依頼

だけでなく、大手レコード会社からも声がかかった。だが、そのとき、もうバンドは存在しなかった。

自分でも信じられないような才能が突然見つかる。だが、あと一歩のところまでその才能が消えてしまう。何が原因なのか、足が速くなったときも、歌が上手くなったときも、共通の何かを感じた。

それは何なのか…

それは、あの日、あの老人に出会った事で氷解する。

あの日、悩みながら、街をふらついていると、突然、声をかけられた。

「お悩みのお兄さん」

チラツと声の方に目をやると、汚らしい浮浪者のような老人がこっちを見ている。

関わっても良いことは無さそうだったので、無視することにした。

「待ちな、あんたは、自分の才能で悩んでるんだろ」

ハツとした。この老人には何かが見えるのだろうか。

「わかるんですか？」

俺は振り向くと、老人を見下ろしながら言った。

「まあ座んなさい」

そう言いながら老人は、2度、3度、自分の座っているボロボロの新聞紙を叩くと、腰を浮かし、俺が座れるスペースを開けた。正直座りたくは無かった、だが、何かわかるならと汚い新聞紙に腰をおろした。

「あの…」

と口を開きかけたが、それをさえぎり老人がしゃべり出した。

「汚い格好だと思っただろ、だが、わしも自分を汚いと思っている」

一体この老人は何を言いたいのだろう…

「だがな、こうしてると見えるんだよ、人の才能が…」

「わしは、以前会社を経営していた。だが倒産し、家も家族も失った。そしてこういう生活をはじめたんだ、最初は辛かった。だが、あるときこうして座って、通り行く人々を眺めていると、才能が見えたんだ。」

「才能が見える？」

「そう、頭の中にこう、イメージとして伝わってくるんだ。例えば、野球の才能がある少年が通る。すると、そいつがプロ野球のユニフォームを着ているのがイメージとして頭に浮かぶんだ。その少年はサッカーボールを持っていたけどな。」

「え」と、つまり、未来が見える？」

「いや、未来じゃない、あくまで才能だ。その、サッカー少年だつて、サッカーを続けてしまえば、野球の才能に気づくことなく大人になるだろう。」

多少信じかけていたが、よくわからない汚い老人の言うことだ。俺は疑問を投げかけた。

「爺さん、そんな才能があるなら、それを生かして、もっといい生活ができるんじゃない？」

老人は、それを聞くと、うなずき、話しだした。

「わしが、この才能に気づいて、すぐのことだ。わしは、予知能力の才を持つ若い男を見つけた。そいつもはじめは、わしのことなど信じなかった。わしは言った、お前には予知能力があると、何かあったら、ここへ来いと。翌日、男は戻ってきた。予知夢をみたという、わしと行動を共にすれば、金に困ることは無いという夢だったらしい。わしも、そいつに人生をかけ、男の能力を開花させようと努力した。最初は失敗もあったが、次第に成功するようになり、ついに百発百中、ギャンブルで金は倍倍に増えた。だが、ある日、男は、一枚の宝くじを置いてわしのもとを去っていった。才能が開花したんだ。いつまでもわしに分け前をやるより、一人になったほうが、そりゃ儲かるだろう。」

「その宝くじって当たったんですか？」

「当然な。ほれ」

老人はポケットからグシャグシャになった札束を放り出した。

「じゃあ、なんでこんな生活を？」

「別に金には困ってないし、家もあるんだ。だが、普通に生活していても退屈だ。不思議なことに、この格好でないと、この人の才を見抜く力は発揮されないようだな。わしはこうして、街を行く人々の才を見て楽しんでいるのだよ。ときどき、お前さんのような訳のわからない奴も発見できるしな。」

この格好の老人にふさわしくない札束を見たときから、疑いの念はだいぶ消えていた。

「じゃあ、俺の才能も見えたんですね？」

「ああ、だが、お前さんみたいなのは、見たこと無いよ、初めてだ。」

「はっ…早く、教えて下さい。」

老人は一度天を仰ぐと、俺の目をじっと見つめこう言った。

「いいか、嘘じゃないぞ、お前さんから伝わってきたイメージ、それは、牛だ。」

呆れたというか、聞き間違いだと、耳を疑った。

だが老人はもう一度「牛」と言った。

「訳のわからないことを言わないで下さい、もう帰ります…」
立ち上がるうとした俺の腕を老人はしっかり掴み、言った。

「聞け、お前さんは非常に特殊だ、これはわしの解釈だが、おそらくお前さんが、ある一頭の牛の肉を一定の量以上食ったとき、そしてその牛が特殊な才を持っていたとき、その牛の才がお前さんに乗り移る。おそらく、一度に一頭分の才しか持てない…。つまり、お前さんの才は、変化する。どうだ、過去に思い当たるような事はなかったか」

俺は静かに頷いた。普通なら信じ難い話だ。だがこれなら過去の

出来事にも説明が付く。

「そうか…」

と言うと、老人は掴んでいた腕を放し、最後に一言だけいった。

「気をつける、才、次第でお前は…善にも悪にもなる」

老人と出会った翌日、俺は肉屋で1キロの牛肉の塊を買い、それを全部食おうとした。

だが、半分で体が限界に達し、気分が悪くなった俺はそのまま眠りについた。

目が覚めると、何か変化はないか、自分の体をじっと眺めた。どこも変わっていない、だがよく考えれば、今までだって、体が変わった訳ではなかった。

あの感覚と共に、気づくのだ。

仮に今、何かの才能を持ったのだとしても、それ呼び起こす何かがなければ、気づかないのだろう。そうだ、あの老人なら、今の俺の才能も見えるかもしれない、家を飛び出し、俺は老人のいた場所へ向かった。

しかし、そこに姿はなかった。

結局、あの老人とは以降会っていない。

自分の中に何らかの才能が存在しているのか、いないのかすら判らない。これまで体で感じた才能の変化は2度。それに気づくことは簡単ではないように思えた。

ところが、それは予想外にあっさり数学の授業中にやって来た。

俺は、それまでバンドに熱中し勉強など後回し。おかげで成績は決して褒められるようなものでは無かった。だがその日、普段なら、

わかりません、で済ます黒板に挙げられた難問が簡単に解けたのだ。頭の回転が変わったというか、脳ミソが別のものになった。これが次の才だった。

俺はこの才のおかげで、一気に成績はトップクラス入り。そして、あっさり超一流大学に合格した。

大学で学び、一流企業に就職、そんな順風満帆な将来が、ほぼ手の中にある今、新たな才能など必要なかった。仮に、別の才能を手に入れたとして、それを呼び起こせるという保障は無い。そのまま、何の才能も見つけられず、ただの凡人として、一生を終える可能性すらある。

そして俺は一生牛肉を口にしないことを決意した。

それを守ったおかげで、一流企業への就職も決まった。

すぐに、仕事にも慣れ、数年後、同僚と結婚した。

結婚生活に仕事、すべて順調で幸せだった。

正直なところ、本当の俺なら、こんな素晴らしい生活は送れなかっただろう。この才能のおかげだ。

だが、今日ですべてが変わった。

大きな仕事がまとまり、俺は同僚達と飲み明かし帰宅した。深夜だというのに、寝ずに帰りを待ってくれていた妻が、夕食を出してくれた。俺は相当酔っていた、そして、あまりよく考えずにそれを食った。

「美味しい？」

妻がニコニコしながら聞いてきた。

「うん、美味いよ」

「それなにか分かる？」

「何って、とんかつだろ？」

妻は、ふふつと笑いながら言った。

「ハズレ、それ牛、何だ食べれるじゃん。」

俺は口の動きを止めた。妻には牛肉が食べれないと言っていた。だが、酔っていたせいかな、ずっと牛肉を食べていなかったせいか、一口食べてもそれが何の肉かなど考えず、ただ食べていた。皿を見るとすでに何も無かった。

「……」

言葉がでなかった。

ベッドに横になり、考える……

量が足りない分、才能は変わらないかもしれない……

だが、もし変わってしまったら……俺はどうなるんだろうか……アルコールのせいか睡魔が激しく襲ってくる……

そのまま眠ってしまった。

目が覚めた。

寝ていたはずの俺は、何故かベッドの横に立っていた。

自分の体を見ると大きな異変があった。

体中、血だらけだ……

そしてベッドには血だらけの妻の姿があった。

どういいうわけか、妻の体から臓器というものすべてが綺麗に取り除かれており、それらは床に転がっていた。

俺がやったのか……

この状況……

俺以外に誰もいない……

まさか、そんな……

そんな才能あるわけない……

あの老人の言葉を思い出した。

「才、次第で善にも悪にもなる……」

（後書き）

3 作目です

感想、コメントいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545f/>

才

2010年10月8日15時36分発行